本邦上代の佛像に就て

東京帝國大學教授
文學博士　瀧　精一

一

私は此處に掲げてある如く本邦古代の佛像についてお話をする。それは故人が豫てよりの佛教篤信者で、且又美術にも深い趣味を持つてゐられた、といふことを加藤君から聽いたからである。

東洋の佛像殊に彫刻に表現された佛像は之を西洋のに比べて必ずしも同一の見地から批判することは出來まいと思ふ。西洋のは多く古代希臘の彫刻に則つてゐて、それには又自ら一定の特色を存するが、東洋の佛像彫刻がそれと全然同じものであるとは云へないやうである。

日本の佛像彫刻にも色々あつて、其中の或る物には希臘の彫刻に似てゐるのもあるが、凡てがさうであるか否かは疑問である。殊に同じ佛像彫刻でも後世の日本佛像の起源を爲すものと云つて可い上代の古い作物になると一種特別の性質を具へてゐて、西洋のとは大分懸絶してゐる。此の古佛像の特別性質を如何に解するかは日本の佛教藝術史上に於て頗る大切と考へる。

私が我が國上代の佛像と稱するのは、藝術史の上で謂ふ推古時代或は飛鳥時代初期の佛像彫刻の事であるが、此の時代の佛像彫刻は、其の時代の遼遠である割合に今日意外に多くの確な作物の蹟を歴然と遺してゐる。それはどんなものかといふと、推古代の佛像彫刻として第一に擧ぐべきものは、大和國法隆寺の金堂に安置してある藥師像である。

此堂内には幾体かの古佛像があるが、金堂に入つて其向つて右にあるのがそれである。この藥師像は古記錄によると、金泥銅即ち唐銅に鍍金を施したもので、略して之を金銅佛と稱する。大きさは略々實人大の座像で、臺座の上に坐つてゐる。其の光背の裏には、可なり長い銘文が彫つてあつて、それに依つて自ら由來が分明するのであるが、それに依ると、最初に造像の發願を遊ばされたのは 磐余ノ池邊ノ雙槻ノ宮ニ御宇天皇 即ち用明天皇で、天皇御不豫の時、特に推古天皇と廐戸皇子とを側近く召され、御平癒祈願のために造像の事を命せられたが、御願を果さずして崩御になつたので、曩に大命を受けさせられたお二方が、推古天皇の十五年丁卯の歳に御遺旨を体して造らせられたものである。

即ちこれが法隆寺金堂の最初の本尊で、先づ此の像が出來て金堂が出來、法隆寺が成立つたのであるが、現今は本尊でない。しかし何はともあれ、由來の分つた推古像として標準とも見るべき立派なものである。

今一つは現に金堂の本尊と仰がれてゐる釋迦像である。所謂三尊佛で左右には両脇士が侍立してゐるこれも同じく金銅佛で、光背銘に依ると、推古天皇三十一年の製作である。製作の由來も右の銘文で分るが、即ちそれに從ふと、推古天皇の二十九年に、用明天皇の皇后即ち厩戸皇太子の母君が崩ぜられ、續いて其翌年に又、太子も太子妃も相並んで病床に就かれたので、王子が諸臣と共に之を憂ひさせられ共に發願して太子御等身の釋迦像を造らうとせられた處、間もなく太子も太子妃も薨せられた爲め、ここに愈々取急いで最初の所願を果させられたものである。夾侍、莊嚴部、光背、臺座、天蓋等の何れも同時の作で、作者は鞍作首止利、即ち有名な佛教藝術の泰斗鳥佛師である。

右の二つの像は共に推古佛の典型として顯著なものであるが、尙他の推古佛で銘文があつて時代も略分るものが二三ある。例へば元は法隆寺の寶物で、今は御物になつてゐる金銅四十八体佛の如きはそれである。何れも餘り大きいものではなく、概ね一尺内外で、最大の物でも二尺を越えない。此の四十八体佛の中に形式から見て推古佛らしいものが可なりあるが、殊に其の銘文に依つて年號の或る点まで推定されるものが幾体かある。その一つは丙寅歳正月十八日……作とあるもので、果して推古佛であるとすれば、丙寅はちやうど十四年に當るから、前に述べた藥師像よりも一年古いことになる。製作も

簡單であるし、形も大きくなく、表現された佛も如意輪觀音であるか彌勒であるか判然しないが、確に價値のある面白いものである。

次に又、同じく四十八体中で、辛亥歳七月十日在銘のものがある。加佐郡の某が死んだ年に其子と伯父とが發願で作つた一尺未滿の觀世音像である。これは從來議論のあるもので、辛亥歳は、推古時代を中心として考へて、繼体天皇の二十五年、崇峻天皇の四年、孝德天皇の白雉二年の中の何れに當るかゞ問題である。

或は崇峻天皇の四年がさうではないかと云はれてゐるが、其時分には既に作佛の道が開かれてゐたのであるから、必ずしも否認は出來ないし、又、白雉二年としても形式は適當してゐるので、議論が二派に岐れてゐる。若し崇峻天皇の四年であるとすれば在銘中の最も古いものになるが、今日の處ではまだ何れとも決定してゐない。これも形は小さいが簡潔で面白いものである。確かに推古佛の一標本として可からうと思ふ。

それからまだある。矢張りこれも法隆寺金堂の中にあるもので、須彌壇上の四隅に立つてゐる四天王の像が確に推古佛である。實人大木彫の立像で、今迄例に擧げた如來像や菩薩像とは類を異にした天部の像ではあるが、一種の推古佛として奇古愛すべきものがある。其の中の二体即ち廣目天と多聞天の圓

い光背の銘に、一つは「藥師德像保上而鐵師手古二人作也」一つは「山口大口費上而次木閉二人作也」と記してある。此山口大口費は當時の有名な藝術家で孝德紀にも名前が出てゐる。即ち漢ノ山口ノ直大口とあるのと同じ人で、天皇の白雉元年に詔を奉じて千佛像を刻んだ日が記されてある。

以上は何れも在銘の推古佛であるが、其外に又無銘ではあるが推古佛たる事の確なものが幾体かある其中でも第一に優秀なのは法隆寺夢殿の本尊たる木彫の觀音立像で、これには全体に金箔が押してある確な銘こそないが、古記錄に依ると上宮王等身の像であることが歷史上明らかである。元、推古天皇の御念持佛だつたもので、作者は不明であるが、非常に優れた作である所を見ると、いづれ當時の大家の作であらう、矢張これも鳥佛師と考へて不當であるまい。

無銘の傑作として、右の觀音像に次ぐものには、中宮寺の本尊である如意輪觀音像が先づ算へられる木彫で、これも記錄には彌勒像ともある。それから法隆寺の百濟觀音、これも木彫で高さは七尺四寸ある。或は虛空藏菩薩であるとも云はれてゐる。

京都の太秦廣隆寺にも亦、中宮寺の本尊に似た古佛像があるが、其外御物四十八体の中にも無銘の推古佛がある。又朝鮮出來らしいもので曾ては印度佛と呼ばれたものも交つてゐる。推古と天平との中間時代の作品らしいものもある。又、四十八体以外の物で、法隆寺から帝室への献上に係る釋尊誕生の像

摩耶夫人の像なども面白いもので、矢張推古時代と聲明され得る金銅佛である。

斯ういう風に無銘の推古佛まで算へ立てると可なり澤山あつて、世間にも相當散在してゐる。勿論大きいのは無いが、四十八体佛の類の小金銅佛は可なり古いものが方々にある。しかし総ての推古佛の中で典型となるべきものはと云へば、何と云つても法隆寺金堂の鳥佛師在銘の三尊佛、藥師像、並に夢殿の觀音、の三つで、此の三つさへ見れば、推古佛の特色を明らかにすることが出來ると云つても宜しい。

二

推古佛の特色は一見して何人にも分る。それは其の相貌が圓滿ではなく寧ろ奇異の趣を具へてゐる事である。第一に先づ顏の輪廓が後世の佛像の如く圓滿でない。そして耳が長く垂れ、眉目の間には一種特異の相を現してゐる。だから隨つて其の顏貌も柔和でなく、勇氣充滿して鋭い感じがある。勿論体部もそれに相應して、決して婉曲なものではない。立像などは身長が甚だ高くてスラリとしてゐるし、それから又大体の形も直線的で、勁直といふ漢語がよく之に相當する。

尙考古學的に形式の特異な點を擧げると細かい特色が幾つもある。例ば螺髮の形式、天衣の飄轉法、菩薩の一部の形などがそれであるが、要するにそれ等は枝葉であつて、最も著しい特色は顏貌が勇氣に

滿ち、身体もそれに釣合うて長身勁直である事に存するのである。

そこで何故に推古佛には斯かる特色が存するかといふ事が問題になつて來るが、歴史家の間では、これを美術の未熟な結果に歸して、圓滿相を表現し得ないのは畢竟幼稚なからであると解してゐる人があ る。今一度違つた言葉で之を言改めると、技術が進歩すれば自然と佛の姿が婉曲優美になつて來るのが通例である。

然るに推古佛は我國佛教藝術の早期に作られた最古の物であるから奇異の趣を呈してゐるのである、といふわけで、一時はこれが通説であつた。如何にも一理ある説で、推古佛は假に之を天平佛に比べて見ても確に技術の圓熟を欠いてゐる。殊に金銅佛に到つては鑄金法に於て不十分な點が明らかに指摘される。例へば天平佛の傑作と云はれる藥師寺の金銅藥師像彌陀像などが驚くべき精巧な鑄金法を示してゐるのに對して、同じ藥師像でも推古時代の物は精錬されてゐない。

しかしそれは單に一部面から觀ての話で、全体として未熟なものであるとは云へない。或る點に於ては意外の巧緻な仕事が行はれてゐるのである。今日一部の歴史家が云ふ如く、圓滿優美の相を現し得ない程に幼稚であるとは認められない。これは特別なる理想があつて殊更に前述のやうな表現形式を用ゐたものと見た方が遙に適當であらうと思ふ。

そこで推古佛の淵源を成した支那の佛像を一應調べて見る必要がある。云ふまでもなく我佛教藝術は其初め支那から其の形式、技術方法を傳へたもので、手本は支那の六朝時代といふよりも、寧ろ南北朝時代の佛像に存するのであるが、其の時代の支那佛像はどんな姿をして居るかといふと、唐朝の人で佛教美術史の有力な資料を提供した支那の或る律師は「造像の凡相は……皆唇厚く鼻高く、目長く、頤豐にして亭然たる丈夫の姿なり。唐より以來妓女の形に似たり」と記してゐる。のち其の言に依ると、唐以前の支那佛は何れも亭然たる丈夫の姿に表現したものであるが、隨唐の間に、それが和らいで柔弱になり、妓女の如き姿を示すに至つたので、律師は尙「宮女の美なる者を菩薩の如しと云ふ」に至つたのは其の結果であるとしてゐる。

これは頗る注意すべき記載であつて、今日支那に殘存してゐる南北朝時代の佛像は如何にも律師の指摘した如く、丈夫の相を現してる物が多いのである。我が推古佛の奇相は即ち此の丈夫の相であつて、両方を比べ合はせて見ると、不思議な程ピッタリと一致してるのである。

それでは何故に南北朝時代の支那佛像は斯かる姿に現はされてゐるのであらうか、次には之を考究して見ねばならぬ。

三

私は日本の推古佛が奇古の姿を示してゐるのを以て製作技術の未熟に歸する學者のある事を前に述べたが、此の評語は同樣に南北朝時代の支那佛に移しても云へるであらうか。之に就ては「矢張さうである」と肯定する論者もあるが、或る人々は又、當時の支那は拓跋氏の理想から出來てゐる特徴を基として、粗野にして且つ剛毅な性質を具へた民族精神の横溢してゐた時代であるから、それが基調となつて、ああいふ雄渾な特質を現したのであらう、と唱へてゐる。しかし私としては両說の何れとも異つた別の意見を持つてゐる。

律師は唐時代を分界線として、其以前の佛像は亭然たる丈夫の相を現し、其以後のものは優柔妓女の如しとしてゐるが、其言葉の裏には何か特別な意味が含まれてゐないであらうか。私は之を解して、佛像は優美の姿にあるべきものではない、寧ろ丈夫の相たることを本色とするものである、といふのが律師の根本觀であらうと思ふ。それで段々考へて見ると、律師の考へ方には動かすべからざる根據が存在する。

凡そ佛と稱するのには幾多の種類があつて、之を一律に論定することは出來ないが、佛陀如來は一般に智慧を理想とすることから離れられない。そして殊に佛陀如來の理想の基準ともいふべき釋迦如來は之を經文の上で見ると、第一に智力に於て立優り、雄健の相を具へ、其身に八十種好を有するとせられ

てゐる。

既に釋迦如來が右の如く智力を本体として雄健の相を具へるものとすれば、他の佛陀如來も同樣でなければならぬのは勿論の事である。次に菩薩はどうかといふと、これ亦大体に於て佛陀と根本思想を同じくする。

ところが佛菩薩は又其の反面に於て衆生濟度の任務を持つてゐる。だから其の方面からは慈悲の德がなければならぬ。此の智慧と慈悲とは佛菩薩の両面たるべきものであつて、両面の對照は又やがて唯一絶對の中に歸するのが本義であるが、實際の表現方法としては、自然、智力の表現に重きを置いて雄健な鋭い趣を帶ばしめんとする道と、慈悲の相に重きを置いて、圓滿な優しい趣を呈せしめようとする道との二つに別れざるを得ない。

支那に於ては南北朝時代、日本としては推古時代の佛像は、前者即ち智力の現れを眼目としたもので律師の賛成するのは此の方である。次に後者即ち慈悲の相を主とするものは、支那では律師所言の通り唐朝以來、日本では天平以來、盛に用ゐた所の表現法である。此の二つの表現法は共に各々長所があるが、後世は慈悲に傾いて智力の表出を怠るに至つたがために、柔和な姿が主になつて力の感じを減じ、遂に藝術として形式的に陷つたのは、寧ろ我が佛教藝術の上に見る弊害と云はねばならぬ。それから

見ると我が推古佛が、假令其の一部に稚拙な点があるとしても徒らに圓滿、徒らに優美な形式を欲して佛の本相を失はんとする者に比べて、正しく古意を傳へてるのは、大に賞美すべきことであると思ふ。

四

以上に述べた如く我が推古佛の特色は、支那の南北朝佛に見る所のものと同一で、畢竟我が國のそれは支那の支流たるに過ぎない觀があるが、しかし茲に注意せねばならぬのは、南北朝佛と推古佛との兩者に共通な特色は、之を今日から見ると、寧ろ彼に於てよりも我が推古佛に於て明白に、且つ鮮明に表現されてゐる事である。

只南北朝佛は數に於て我が推古佛を凌ぎ、殊に石佛は近年非常に多く現れて、銘も在り、年代も明らかに彫出されてゐる。だから其の點では到底我が推古佛は彼に及ばないが、數は少くても其の表現は立派なもので、律師が述べた南北朝佛の特相は、我が推古佛の說明とした方が却つて當て嵌るのである。法隆寺金堂の釋迦像及び脇立の如きは、殊に最も其の特色を發揮してゐる。夢殿の觀音も佛陀如來の智慧の現れとして最も徹底したもので、此の二つの佛像程、其の時代の佛の理想を鮮明に表現したものは日本は勿論、支那にも容易に發見することは出來まい。實に日本として誇るべき大傑作である。

私は前に、日本の佛像彫刻と希臘の彫像とは必ずしも同じものではない、といふことを述べたが、右

の如き特色を特つてゐる我が佛像と、寫實を基本とする希臘の彫刻との間に、どれ程の隔たりがあるかといふことは、以上述べ來つた所に依つて自から明瞭になつた事と思ふ。

時とすると、推古佛を強ひて希臘の彫刻に引きつけて論じようとする人が西洋にも日本にもあるが、餘り深入して論ずるのは宜しくない。両者は確に根柢に於て異つてゐる。概念的に言ふと、希臘のは神の姿を現すにも人間美的で、其の範圍を離れない限度に於て神秘的な理想を表現しようとしてゐる。それが即ちアイデアリズムなのである。ところが推古佛にあつては、そんな理想主義は現れてない。身体の釣合其他に於ても實際の人間を其儘には現さずに、可なり懸けはなれた表現を企て、寧ろ自然を破る上に於て却つて精神的な味を出さうとしてゐる。だから其處に現された智力は人間のものではなく、それ以上の者の智力である。自然らしい人間の身体に宿るものとしては餘りに偉大に過ぎる。

つまり佛の智力を人間の肉身に宿らしめようとはせずして、寧ろ佛智の表現を象徴的に示したところに、我が推古佛の大なる藝術的價値が存するのである。

尚次に一言する要があるのは、推古佛に於ての莊嚴部の事である。莊嚴部とは附屬の光背、臺座、天衣等を指すものであるが、此の三つが具足してゐるのは推古佛の最も貴い所である。凡ての佛像には莊嚴部のあるのが當然であるが、古い佛像になるとそれが欽落ちてるのが通常であるのに、推古佛に限つ

て幸にも具備してゐるのは欣ぶべき事で、これに依つて佛の特質が明らかにされ裏書される。推古佛中で最も其の莊嚴部が完全に揃つてゐるのは法隆寺金堂の釋迦三尊佛で、とても支那南北朝の石佛などには見られない完全さである。莊嚴部の中でも殊に最も大切なのは光背であつて、推古佛に於てはそれが最も盛な形式を具へてるのであるが、金堂三尊の光背は其の典型的なものであると云つて可い。次には夢殿の本尊佛の光背がこれ亦頗る盛な彫刻である。三尊の程大きくはないが寶珠形の面白いものである。是等の光背は何れも後世の佛像に於て見るのとは性質の違つたもので、佛像其のものゝ性質と正に合致してゐる。即ち佛像それ自体が力强い雄健な趣を持つてゐるのに伴うて、光背は力と旺盛な意氣を示してゐる。殊に、火焔の勢甚だ盛なのは、推古佛に見逃せぬ特色であつて、後世の佛像・例へば藤原時代の製作に係る、定朝の四天の光背などは、形式も頗る發達してゐるし、如何にも意匠が巧緻で、盛なものであるには違ひないが、餘りに製飾的で、推古佛の光背が佛像自体と調子を合はせて雄健な佛の智力を現し得てるのとは、とても面白さが違ふのである。

抑も佛像に光背を附する所以は經文の明らかに示す所で、佛を形容した句には大抵光明の觀念を伴つてゐる。例へば「日の天に麗なるが如く」とか、世尊の光明は太陽以上であるとか、佛身には皆金色の光彩があるとかいふに、佛を大光明の發源体であると見て、佛体から赫耀たる光明を放つことが佛の威

嚴を示すとするのが佛教の本旨である、されば佛の力を藝術の上に現すのには光明の趣を出すことに苦心を要するのであつて、佛像製作についての根本經典たる大乘造像功德經には、釋尊が母君のため三十三天へ說法に赴かれたので、此世が暗黑となり、恰も夜空の中に月を失つたやうな狀態となつたのを人々が歎いて、せめては形代の淨像でも作つてそれを禮拜の標的にしようと思つたが、當時の工藝家は何れも其の製作に當ることを否んで、釋尊の他の点は摸倣出來るが、只光明の威德は到底現せぬと辭退した中に、獨毘首羯摩が其任を引受けて、立派に仕上げた。といふ說話を傳へてゐる。乃ち此の話から考へても佛には光明の威德が如何に大切であるかゞ分るのである。佛の三十二相といふ中には種々の事が交つてゐるが、分拆して見ると多くは光明の觀念の中に攝入される。佛像を造る上に於て、光背に重きを置くのは全くこれが爲である。推古佛に盛な光背を作つたのは勿論南北朝佛に學んだものであらうがそれが佛教の本旨に合するものであることに特に注意すべきである。

こゝに今一歩を進めて考へると、佛の光明には二つの意味があると思ふ。其の一つは物理的の光明であるが、それは又同時に精神的の光明である。言ひ換へて見ると即ち身光と智光とであつて、此の二樣の光明は二にして一、一にして二である。外的の光明も畢竟は佛の內存の智光であり、智光の溢るゝ所發して身光となるのである。さればこそ經文には佛德を頌へるのに、光明の字を以てするのであつて、

大乘起信論の中にも、智慧其のものが直ちに光明であることを說いてゐる。ところが推古佛にあつては佛其のものが智慧の力即ち智光を現してゐると同時に、莊嚴部殊に、光背に於て光明の盛なる趣を現すことに力めてゐるのであつて、光背が推古佛全体の特色と密接の關係を持つてゐることは、殊に忘るるべからざる所である。私が光背の大切なことを言つたのは此の故であつて、此の盛な光背があつて初めて推古佛の特色は益々發揮され、裏書されるのである。（文責溝口生）

改元號所感

齋藤精一

聖上登遐駭萬民。　慟天哭地極悲辛
豫知昭和年間事。　創造日新又月新

昭和二年元旦作

遭遇卯年正六回。　經綸無策媿微才
閑庭老樹彌加趣。　中有寒梅天下魁
亮陰の庭に籠れる白梅も昭和の風に綻び初めぬ

孩子蛇を殺す

昔。我殿のしろしめしゝ信濃國水内郡富竹村の農民、夫婦共に、田畑に耕作の爲に出でんとて、二歳なる男子をつぐらといへる藁器にいれて、鴨居につり置きて、出で行き、午時にかへりて見れば、小兒はこゝちよげにあそび居たり、おろし見れば、徑一寸ばかり、長四尺もやあらん蛇をつかみて、ふりまはし遊び居たり、蛇はさくに死にたるさまなり、思ふに人のみぬ間に、小兒の血吸はんとて、柱より上り、鴨居よりつたひて、つぐらに入りつるを何ごゝろなく、急所をつかみたるなり、首より三四寸下は、急所にて、うてば忽に死ぬるなり、小兒はさる事しられぞ、全く産土神の守護し給ひしならんと、たふとくぞおもほゆる。（齋藤彦麿傍廂前篇）